

50／教養

山崎亮

＋NHK

「東北発☆未来塾」制作班

まちの幸福論

コミュニティデザインから考える

まちの幸福論

コミュニティ

常州大字山書館
藏書章

山崎亮

+ NHK

「東北発☆未来塾」制作班

まちの幸福論

コミュニティデザインから考える

2012(平成24)年5月25日 第1刷発行

2013(平成25)年1月20日 第3刷発行

著者 山崎 亮

NHK「東北発☆未来塾」制作班

©2012 Yamazaki Ryo, NHK

発行者 溝口明秀

発行所 NHK出版

〒150-8081 東京都渋谷区宇田川町41-1

電話 03-3780-3301(編集) 0570-000-321(販売)

ホームページ <http://www.nhk-book.co.jp>

携帯電話サイト <http://www.nhk-book-k.jp>

振替 00110-1-49701

印刷 文唱堂印刷

製本 田中製本

本書の無断複写(コピー)は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan ISBN978-4-14-081544-1 C0036

まちの幸福論

コミュニティデザインから考える

目次

第1章

カタチのないデザイン

モノを「つくらない」仕事の入口

背中を押されたアドバイス

ハードとソフトを同時に学ぶ

踏み出した一歩——有馬富士公園

デザインにできること

「生活スタジオ」から「studio-」へ

第2章

消えてきたまち、消えていくまち

課題の深層を求めて

なぜ、集落が消滅するのか

かき消された集落の未来像

元の生活に戻ることが、地域再生と言えるか

若い世代をまちに呼び込むためには

第3章

10年後の被災地の未来を考える ドキュメント『東北発☆未来塾』 61

第4章

「つながりの時代」の、新しいモノサシ 105

凝り固まったイメージの鎖を切る 107

若い世代による新たな価値観 109

人とのつながりを担保に生きる若者たち 112

日本人は本当に議論下手か 115

幸福な偶然の積み重ねが、いまの自分をつくる 119

リーダーは「主役」ではない 122

第5章

メソッドを組み合わせてつくる

129

デザインにできる復興支援

130

3・11の夜につぶやいたこと

135

震災後に生まれたつながり

137

まちの遺伝子を生かす

141

コミュニケーションデザインに教科書はない

144

世代の違う人たちをどう結ぶか

147

さまざまなメソッドを蓄えること

151

未来を託せる人材の育成

153

ソフトへの予算と評価

158

第6章

まちの幸福論

他者に委ねられてきたまちの活動

「いたれりつくせり」の功罪

集客都市の果て

芸術とまちの幸福

「ミニマティの「快樂」と「幸福」

「安全」なまちから「安心」できるまちへ

「バックキャストینگ」で生活を考える

夢のかたちはゆるやかに描く

未来へ向かうシナリオを4通りつくる

里山が教えてくれること

日本はかつて、まちづくりのお手本だった

おわりに

参考文献

163

164

166

168

172

176

179

183

187

190

193

195

200

204

まちの幸福論

コミュニティデザインから考える

山崎亮

+ NHK

「東北発☆未来塾」制作班

造本・装幀 岡孝治

まちの幸福論

コミュニティデザインから考える

目次

第1章

カタチのないデザイン

モノを「つくらない」仕事の入口

背中を押されたアドバイス

ハードとソフトを同時に学ぶ

踏み出した一歩——有馬富士公園

デザインにできること

「生活スタジオ」から「studio-」へ

第2章

消えてきたまち、消えていくまち

課題の深層を求めて

なぜ、集落が消滅するのか

かき消された集落の未来像

元の生活に戻ることが、地域再生と言えるか

若い世代をまちに呼び込むためには

第3章

10年後の被災地の未来を考える ドキュメント『東北発☆未来塾』 61

第4章

「つながりの時代」の、新しいモノサシ 105

凝り固まったイメージの鎖を切る 107

若い世代による新たな価値観 109

人とのつながりを担保に生きる若者たち 112

日本人は本当に議論下手か 115

幸福な偶然の積み重ねが、いまの自分をつくる 119

リーダーは「主役」ではない 122

第5章

メソッドを組み合わせてつくる

129

デザインにできる復興支援

130

3・11の夜につぶやいたこと

135

震災後に生まれたつながり

137

まちの遺伝子を生かす

141

コミュニケーションデザインに教科書はない

144

世代の違う人たちをどう結ぶか

147

さまざまなメソッドを蓄えること

151

未来を託せる人材の育成

153

ソフトへの予算と評価

158

第6章

まちの幸福論

他者に委ねられてきたまちの活動

「いたれりつくせり」の功罪

集客都市の果て

芸術とまちの幸福

「ミニマティの「快樂」と「幸福」

「安全」なまちから「安心」できるまちへ

「バックキャストینگ」で生活を考える

夢のかたちはゆるやかに描く

未来へ向かうシナリオを4通りつくる

里山が教えてくれること

日本はかつて、まちづくりのお手本だった

おわりに

参考文献

163

164

166

168

172

176

179

183

187

190

193

195

200

204

はじめに

活字を見るとすぐに眠くなるようなタイプだった僕が、中学生の頃に1冊だけ夢中で読んだ本がある。それが暉峻^{てるあき}淑子^{しづこ}さんの『豊かさとは何か』だった。1989年、バブル期の終わりに発行されたこの本は、「モノやお金だけで人生の豊かさは計れない」とを指摘していた。60刷以上を重ね、いまもなお読み継がれている。

暉峻さんは当時の西ドイツでの在住体験を通して、戦後成長を経て世界一の金持ち国家になったはずの日本の「豊かさ」は、経済価値優先主義によって間違った方向に進んでいるのではないかと訴えた。事実として、多くの日本人にとって豊かさは実感されていなかったからだ。それは教育や福祉といった生活保障や、高すぎる地価、労働条件などの構造的な問題に大きく阻害されていたのである。

二十数年を経たいま、僕たちの暮らしはたして豊かさを実感できるようになっただろうか。むしろ、先に挙げたような社会問題は現在もよく耳にするものばかりではないかとさえ思う。事実、過去30年で日本人のGNPは30倍、所得は7倍以上になったのにもかかわらず、生活満足度は横ばいのままだ。豊かさを物質的なものと捉えるならば、

日本は豊かな国であると言えるかもしれない。経済利益が重視され、次から次へと新しいモノが消費者に提供されるから、お金さえあればたいにの欲しいモノは手に入る。建物もどんどん建てられる。それは幸せなことかもしれない。しかし、そうやってモノがつくり続けられていくその先に待つ未来は、はたして明るいだろうか。

聞き慣れないかもしれないが、「コミュニティデザイナー」というのが僕の肩書きである。メディアによつては、「日本でただひとりのコミュニティデザイナー」と紹介されることもあるくらいだから、まだ職業として確立された仕事とは言えないのかもしれない。簡単に言えば、「地域の課題を、地域の人たちが解決するための場をつくるデザイナー」ということになる。仕事柄、1カ月の3分の2以上を日本各地で過ごしている中で、現在起きている日本のまちのさまざまな課題を目の当たりにしている。

この本の発端となったNHKの新番組『東北発☆未来塾』は、東北の若者たちが震災後の日本の未来を考えるとというものだ。そのキックオフ・プロジェクトの講師として僕が選ばれたのだが、収録のため宮城県仙台市の荒浜地区を訪れたことがある。海岸沿いの砂浜には『東日本大震災慰霊之塔』が建立されている。ここは、3・11の巨大地震による大津波で壊滅的な被害を受けた地域だ。一緒にいたのは、17人の大学生た